

伊藤隼也
Shunya Ito 也が行く



おりがみで作ったかわいい「赤いほっぺ」をつけて、クラウンを待つ子どもたち。発案者はお母さん。



病棟を回る前に、どの子に会いに行くのか、気をつける点はないかなどをきちんと確認する。



病院に「笑い」は必要です。絶対に！

vol.3

お子さんが笑う、お母さんが笑う。そして看護師も笑う。それがいいコミュニケーションに、いい循環につながっている。

転載・二次使用禁止

今回、伊藤隼也さんはクリニックラウン*を導入した小児病棟取材。そこで働く看護師、高桑津賀子さんに話を伺いました。



名古屋第一赤十字病院 小児科病棟
たかくわ つかこ
看護師長 高桑 津賀子さん
昭和26年生まれ
昭和48年山田赤十字高等看護学校卒。その後、山田赤十字病院で勤務した後、結婚や転居を機に第一線から離れるが、昭和62年に同病院に再就職。成人内科を経て、現在に至る。小児科は通算で10年の経験になる。



*クリニックラウンとは
入院中の子どもたちのところに向き、ともに遊ぶことを目的にするクラウンで、診療の「クリニック」と道化師の「クラウン」からその名が付いた。提唱者はアメリカの医師パッチ・アダムス氏。現在はオランダをはじめとする欧米で活動が広がっている。
協力:プレジャー企画 www.pleasure-p.co.jp

伊藤 このような外部の力を取り入れた背景には、現実の問題として、看護師だけではマンパワーも合わせて、足りていない部分があるかと？
高桑 私たち小児看護にあたる看護師は、診療の補助だけでなく、子どもたちの療養環境を整え、心のケアを行うことが求められています。また長期入院のお子さんの場合は、ご家族、とくにお母さんの精神的なサポートも必要なんです。ところが、現実には日々の診療の補助だけで手一杯で、看護師だけですべてをこなすのは、とても難しいんですよ。ですから、ボランティアの方々やクリニックラウンの力をお借りして、少しでもお子さんやお母さんの心が癒されればいいかなって思うんです。

笑顔の子どもと母親を見て看護師も癒される
伊藤 クリニックラウンについては、高桑さんはどうでしょう。
高桑 この試みは私たち看護側の子どもたちに「笑い」の場を提供したいという思いがあって実現しました。ただ、それがこちらの「押しつけ」になっていないか。その点だけは導入時から気にかけています。事前にお母さんに確認をとるだけでなく、終わってからも「今日はどうでしたか？ 疲れませんでしたか」と聞いていま

子どもたちの心のケアのためにクリニックラウンを導入
伊藤 先ほど病棟でクリニックラウンの活動を見せていただきましたが、クラウンと接している子どもたちの生き生きとした表情や、一緒になって楽しむお母さんの姿が印象的で、病院に「笑い」があるということは、とても重要なことだと改めて考えさせられました。
高桑 導入は2年半ほど前で、今は2週間に1度、来てもらっています。事前に親御さんに確認をとり、承諾を得たところだけを回ります。一人あたり5分くらいでしょうか。
伊藤 治療現場でもある病棟にクリニックラウンのような外部の人間を入れたことに対し、看護師である高桑さんご自身はどう考えますか？
高桑 クリニックラウンの件は、看護部長の意向で取り入れることになりましたが、私自身も患者さんにプラスになるなら、取り入れることは賛成でした。もちろん、受け入れる側として、ケアの方法や内容、手順、感染面の問題など含めて、きちんと対応したうえでの話ですが。

すし、導入当初は看護師がクラウンと一緒に病棟を回り、子どもたちの様子を確認し、最後にクラウンを交えて反省会を行いました。今はしていませんけれど...
伊藤 クラウンが来ているときは、お子さんやお母さんだけでなく、看護師さんも一緒になって笑い、楽しんでいましたよね。それを見て、僕は「これはいい」と感じたわけです。病院で看護師という存在は、お子さんやお母さんの最も近くにいて親身になってくれる医療スタッフです。それだけに看護師の言動がお子さんやお母さんに直接的に影響を及ぼすことだってあるわけで、その点からも、クリニックラウンのような活動は重要だと感じました。
高桑 子どもたちやお母さんが楽しんでる姿を見た若い看護師が、これを看護の喜びとして感じ取ってくれる。いい循環です。第一、笑顔で癒されない方なんて、いませんから。
子どもに少しずつ変化が失語症の子も言葉を取り戻して...
伊藤 子どもたちの病状になにかしら変化をもたらしたことは？
高桑 病気と治療によるストレスで失語症になってしまった脳腫瘍の男の子が、言葉を取り戻しました。遊んでくれるクラウンに「ありがとう」



病棟の廊下で「ハイ、チーズ」。

感情を表に出すことは、心のリハビリテーションである。
その行為は、奇跡的な快復をもたらす可能性さえ秘めている。

が言いたくて、「あ」という発声が出たんですね。体を動かすことが体の機能のリハビリになるように、感情を表に出すことが脳のリハビリになったように思います。

伊藤 こうした子どもの変化を具体的な看護の現場にフィードバックすることは考えていますか。

高桑 クリニクラウンによってどれくらい精神的にケアできたかという点については、改善度が血糖値や血圧のように数値で測れるものではないので、難しいですね。どうすればいいかは、今後の課題でしょう。

“自分たちだけでがんばる”から
“他の専門家にも頼る”現場へ

伊藤 ところで高桑さんは小児看護のご経験は長いのでしょうか。

高桑 小児科だけで、10年になります。

伊藤 当初と比べ、看護現場は変わりましたか。

高桑 私が看護師を始めた時は、看護師だけががんばろうという意識が強く、外部の力を借りるなんてまったく考えられませんでした。第一、クリニクラウンのような方々がいませんでしたしね。

伊藤 看護師にもメンタルケアの部分は専門の方々に任せようという、棲み分けの考えがでてきたわけですね。

目的と達成感のある仕事は、続けられる。
ここでは「子どもの笑顔」が目的で、
達成感であると感じた。

伊藤 それでも、今、病院に「笑い」がある。すばらしいことだと思います。欧米では各病棟にメンタルケアができる臨床心理士などのスペシャリストが配属されていますが、日本ではまだまだ足りていないというのが現状です。高桑さんからみて、どうでしょうか。

高桑 現場にいると、まったく足りていないことを痛感します。こちらの病棟ではようやく今年の4月から保育士が常勤となりました。ドクターの許可が必要ですが、それでも以前よりはずっと自由にプレイルームで遊べるようになりました。これは喜ばしいことです。

燃え尽きない職場環境を
つくるのが先輩看護師の役目

伊藤 これまでたくさんさんの医療関係者に取材をしています。みなさん口を揃えて「疲れた」と言っているんですね。とくに看護師さんは熱意がある分、バーン・アウトになりやすいようです。

高桑 うちもけっこう大変なんです

高桑 看護師って、自分たちでがんばってしまふことが多いんですけど、治療や看護で手一杯なんです。それ以外のことは、時間外でするしかありません。例えば小児病棟では季節ごとにイベントを用意していますが、プランを立て、買い物をして、準備を整えるのは、これまではすべて看護師の役目でした。勤務中は忙しくて時間がないので、結局、夜勤明けや休日にやることになる。それが今は常勤の保育士に一部をお任せしたり、小学校の先生の知恵を借りたりしながら行えるようになりました。



伊藤 それによって、時間的、物質的なものでなくて、心に余裕が出てきたわけですね。

高桑 患者さんが楽しめたり、癒されたりできる場を提供する、環境を整える、それも看護師の役目だと考えています。この病棟の看護師は若い人が多く、育児経験のない者が半分以上います。子ども好きで、小児の看護がしたいという強い熱意を持っている看護師ばかりですが、専門性、経験という意味では、まだまだ力不足です。

転載・二次使用禁止

よ(笑)。ただ辛い、私たちの病棟では、バーン・アウトで辞める看護師はほとんどおりません。結婚で転居が必要になったケースが多いですね。

伊藤 それはすごい。でも、なぜだと思いませんか？

高桑 仕事面での忙しさは、どの病棟の看護師も同じだと思います。ただ、小児科の看護師は、根本的に子どもが好きなんです。少しでも子どもと一緒にいたい、遊んであげたい、笑顔にさせたいという気持ちを持っていて。だからかもしれない。

伊藤 どんな仕事もそうでしょうが、達成感があるとがんばれる。個々の看護師さんにとっての達成感は、子どもたちの笑顔なんじゃないかな。

高桑 まさにそのとおりです。私たちのような先輩看護師も、熱意をもった若い看護師が燃え尽きないように、職場環境をよくしていかなければならないと思っています。

伊藤 最後に、お伺いします。病院に「笑い」は必要ですか？

高桑 必要です、絶対に。



伊藤隼也
(いとうしゅんや)
写真家・医療ジャーナリスト
医療情報研究所代表
日本医学ジャーナリスト協会会員
医療機能評価機構・広報委員
患者中心の医療を実現するため
医療ジャーナリストとして
テレビや雑誌などのメディアで活動中
ホームページ
shunya-ito.tv